

本報告書の全部又は一部の無断転載転売を固くお断りします。

KAKEN

No. 05-19-041087-1

試験報告書

依頼者: Nanolux Japan 合同会社 様
 品名: ナノツルコンフォート 1点
 試験項目: ガスの除去性能評価試験

2019年 9月27日付で当所へ提出された試料の試験結果は下記のとおりです。

2019年10月 3日


 〒530-0802 大阪市東淀川区西2丁目4番19号
 一般社団法人 **カケンテストセンター**
 大阪事業部 分析ラボ
 Tel 06-6441-6732 Fax 06-6441-6803

記

【試験結果】

アンモニアガスの除去性能評価試験

試料	初発濃度 (ppm)	2時間後	
		ガス濃度 (ppm)	減少率 (%)
原布	100	≤0.5	≥99
ブランク(空試験)	100	81	—

【試験方法】 SEKマーク繊維製品認証基準で定める方法 ((一社) 繊維評価技術議会) ただし、試料量は200cm²とした。

【使用バッグの種類】 スマートバッグPA (ジーエルサイエンス社製)

【試料】

KAKEN KAKEN KA

図 1 上

※ 報告書に記載の試験結果は試験材料に付するものではありません。また (コーン) 包装の品質を評価するものではありません。事業所毎の24時間露光(47℃)は、当所にて一括責任を有しおこないますので、念のためおしほします。




アンモニアガスの除去性能評価試験

検査機関 一般財団法人カケンテストセンター

試験方法

SEKマーク繊維製品認証基準で定める方法 ((一社) 繊維評価技術議会) ただし、試料量は200cm²とした。

〈使用バッグの種類〉スマートバッグPA (ジーエルサイエンス社製)

試験結果

試料	初発濃度 (ppm)	2時間後	
		ガス濃度 (ppm)	減少率 (%)
原布	100	≤0.5	≥99
ブランク(空試験)	100	81	-

2時間後のガス減少率99%

本報告書の全数又は一部の複製・転載・引用を禁じます。

KAKEN

No. OS-19-02999-1

試験報告書

依頼者 NanoZone Japan 合同会社 殿
品名 ナノゾ 1点
試験項目 抗菌性

2019年8月1日付けで当所に提出された試料の試験結果は、下記のとおりです。

2019年8月20日

カケン
〒050-1002 大宮市西區江原2丁目5番10号
一般社団法人 カケンテストセンター
大宮事務所 生駒つか
Tel 041-641-0999 Fax 041-641-0995

試験結果

No.	試料*	生菌数の常用対数値			静菌 断定性	ΔS
		接種直後	8時間 光照射後**	8時間 暗所保存後		
①	「ナノソルコンフォート」処理 原品	—	<1.3	<1.3	3.5	-6.4
	対照試料・[標準菌(株)100%, 白布]	4.3	4.8	5.3	—	—

注* 紫外線放射照度 1mW/cm²、24時間のブラックライトによる事前照射を実施した。
** 紫外線放射照度 0.1mW/cm²のブラックライト照射下で試験を実施した。

試験方法: JIS R 1702:2012、ガラス密着法
供試菌: 黄色ぶどう球菌・Staphylococcus aureus NBRC 12732

試料 ①

以上

本報告書に於いて記載された試験結果は試験試料に対するものであり、原品(ロット)の適合品等と異なるロットでの試験結果、
試験結果の誤り・報告書に於いては、当社は一切責任を負いませんので、念のため申し添えます。

抗菌性(黄色ぶどう球菌)

検査機関 一般財団法人カケンテストセンター

試験方法

JIS R 1702:2012、ガラス密着法

供試菌

黄色ぶどう球菌・Staphylococcus aureus NBRC 12732

試験結果


試料**	生菌数の常用対数値			(理論上の菌数【=10 ^{log(V)} 】)			理論上の 菌減少率
	接種直後	8時間 光照射後**2	8時間 暗所保存後	接種直後	8時間 光照射後**2	8時間 暗所保存後	
「ナノソルコンフォート」処理 原品	-	<1.3	<1.3	-	20	20	99.980%
ブランク(未施工)	4.3	4.8	5.3	25,119	50,119	100,000	

※1紫外線放射照度1mW/cm²、24時間のブラックライトによる事前照射を実施した

※2紫外線放射照度0.1mW/cm²のブラック台と照射下で試験を実施した。

接種直後の値4.3は黄色ブドウ球菌の量が約1万個を示しており、8時間後光照射後が1.3は約10個の菌の量を示しているため、8時間後でも99.98%殺菌している事を示している。

登録第0319-1号
2020年4月5日



試験検査成績書

NanoZone Japan合同会社 様

一般社団法人東京都食品衛生協会
 東京食品技術研究所
 〒125-0052 東京都葛飾区東 1-12-10

ご依頼の試験品の試験検査結果は以下のとおりです。

受付日	2020年6月2日
試験品	NanoZone Solution
付記事項	
検査内容	マウスに対する急性毒性試験(経口)
備考	

試験検査結果

試験方法	<p>①投与液の調製 試験品に精製水を加えて20%懸濁液としたものを投与用資料とした。</p> <p>②使用動物および投与方法 マウスはddy系、雄、5匹を投与前4時間絶食させ、経口ゾンデ針を用いて胃内に1回強制投与した。投与量は体重1kg当たり試験品4g相当量。</p> <p>③観察方法と期間 投与後の異常の有無について、24時間観察した。</p>
観察結果	マウスに異常を認めない。

※本成績書を複製する場合は当研究所の承認を要してください。

マウスに対する急性毒性試験(経口・24時間)

検査機関 一般社団法人東京都食品衛生協会 東京食品技術研究所

試験方法

①投与液を調製

試験品に精製水を加えて20%懸濁液としたものを投与用資料とした。

②使用動物および投与方法

マウス(ddy系、雄、5匹)を投与前4時間絶食させ、経口ゾンデ針を用いて胃内に1回強制投与した。投与量は体重1kg当たり試験品4g相当量。

③観察方法と期間

投与後の異常の有無について、24時間観察した。

試験品

NanoZone Solution

試験結果

マウスに異常を認めない

マウス実験により人が誤飲してもリスクが少ない事が証明された。

食薬E00389-2号
2020年6月12日

試験検査成績書 (仮)

NanoZone Japan合同会社 様

一般社団法人東京都食品衛生協会
東京食品技術研究所
〒115-0033 東京都港区東横 1-19-10

この種の試験品の試験検査結果は以下のとおりです。

受付日	2020年6月3日
試験品	NanoZone Solution
付記事項	
検査内容	マウスに対する急性毒性試験(経口)
備考	

試験検査結果

試験方法	①投与液の調製 試験品に精製水を加えて20%懸濁液としたものを投与用試料とした。 ②使用動物および投与方法 マウス(ddy系、雄、5匹)を投与前4時間絶食させ、経口ゾンデ針を用いて胃内に1回強制投与した。投与量は体重1kg当たり試験品4g相当量。 ③観察方法と期間 投与後の異常の有無について、1週間観察した。
試験結果	マウスに異常を認めない。

*本成績書を転載する場合は当研究所の承認を受けてください。

マウスに対する急性毒性試験(経口・1週間)

検査機関 一般社団法人東京都食品衛生協会 東京食品技術研究所

試験方法

①投与液を調製

試験品に精製水を加えて20%懸濁液としたものを投与用試料とした。

②使用動物および投与方法

マウス(ddy系、雄、5匹)を投与前4時間絶食させ、経口ゾンデ針を用いて胃内に1回強制投与した。投与量は体重1kg当たり試験品4g相当量。

③観察方法と期間

投与後の異常の有無について、1週間観察した。

試験品

NanoZone Solution

試験結果

マウスに異常を認めない

マウス実験により人が誤飲してもリスクが少ない事が証明された。



ご依頼の試験品の試験検査結果は以下のとおりです。

受付日	2020年6月2日
試験品	nanoSHUSH
付記事項	
検査内容	マウスに対する急性毒性試験(経口)
備考	

試験検査結果

試験方法	①投与液の調製 試験品に精製水を加えて20%懸濁液としたものを投与用試料とした。 ②使用動物および投与方法 マウス(ddy系、雄、5匹)を投与前4時間絶食させ、経口ゾンデ針を用いて胃内に1回強制投与した。投与量は体重1kg当たり試験品4g相当量。 ③観察方法と期間 投与後の異常の有無について、1週間観察した。
観察結果	マウスに異常を認めない。

*平成30年度を以て開始する場合は品質研究所の承認を受けてください。

マウスに対する急性毒性試験(経口・1週間)

検査機関 一般社団法人東京都食品衛生協会 東京食品技術研究所

試験方法

- ①投与液を調製
試験品に精製水を加えて20%懸濁液としたものを投与用試料とした。
- ②使用動物および投与方法
マウス(ddy系、雄、5匹)を投与前4時間絶食させ、経口ゾンデ針を用いて胃内に1回強制投与した。投与量は体重1kg当たり試験品4g相当量。
- ③観察方法と期間
投与後の異常の有無について、1週間観察した。

試験品

nano SHUSH

試験結果

マウスに異常を認めない

マウス実験により人が誤飲してもリスクが少ない事が証明された。